

赤光  
白光

年明け早々の取材で、「多死時代」を迎え、2030年には「終の棲家」が定まらない「看取り難民」と呼ばれる人が30万人を超えると聞き、衝撃

を受けた。医療財政のため、看取りを病院から在宅へと動きがあるが、それが整わず、医療サービスを十分に受けられなくなるというのだ。「老いをいかに生き、いかに死ぬか」を切実に感じた。

▼「家が病室で、町が病棟や」と、最期まで自宅で過ごしたいという思いに応える兵庫県尼崎市の開業医・長尾和宏さんの日常を記録したドキュメンタリー映画「けったいな町医者」が現在上映中だ。そこには、「病」とではなく「人」と向き合い、在宅医療を続ける姿が映し出される。

▼長尾さんは「診療＝業」の現代医療のあり方に疑問を持ち、1995年に病院勤務を辞めて開業。診療の合間に往診を行う。患者に寄り添い、癖を見抜き、病と生活を見る。笑うこと、歌うこと、食べること…日常生活そのものがリハビリであり、治療だという。画面に映し出される患者も現場も温かく明るい。死を迎えた場面も、悲しみはあるが、温かさに包まれ、家族の感謝の思いがあふれ出ていた。寄り添い続けてくれる、こうした町医者が近くにいたら、どんなにか心強い毎日を送ることができるだろう。

▼春のお彼岸。大切な亡き方々を偲びつつ、自らがいかに生き、いかに命を終えていくかを見つめていく機縁にしたい。いつも、どんなときも私に寄り添い続けてくださる阿弥陀さまの温もりの中で。(M)